

5 漢方生理学

はじめに

生理学とは、人体の生命現象を研究する学問である。漢方医学では、西洋医学の生理学とはまったく別の生理系統が人体に存在していると考えており、それらは『黄帝内経』以下、歴代の医書の中にみられる。しかし、漢方生理学が独立した学問として考えられるようになったのは比較的近年になってからであり、その意味では今後の重要な研究分野である。

漢方医学の生理学は、ある程度、陰陽五行説を借りて説明されている。それは、この医学がコスモロジーにその基盤を置いていることと関係があり、その発展の歴史において、さまざまな生命現象を解明する過程で独自の発達を遂げて、きわめて複雑な体系を作り上げた。

ここでは、その漢方医学の生理学についての基本的な事項を概説する。

人体の構成要素とその働き

漢方医学が認識する人体は、西洋医学のそれとはかなり異なっている。前述のように、あまねく宇宙に存在し、体内にもあって生命活動を行う根源となっているのは「気」である。生体内にあっては、気を中心にして他にいくつかの基本精微物質が存在しており、互いに影響し合いながら、生命活動を維持している。

また、体内には臓腑があり、上記の基本精微物質の存在下に、それぞれの生理機能を発揮している。さらに体表や体内には経絡が走行していて、人体の各部

を結び付け、統一体として機能させている。

以下に、生体の機構の理解に必要な各種の用語とその生理学的な意味を簡単に述べる。

気・血・津液・火(陽気)・精

気・血・津液・火(陽気)は人体が生命活動を行うのに必要な基本物質であり、それぞれ生体内で生成され、循環し、代謝され、その過程でさまざまな生理機能を発揮する。人体の臓腑・組織・器官は、これらの基本精微物質の存在下にその機能を発揮することができる。

① 気

気は、父母から授けられた先天の気と、飲食物から吸収された水穀の気と、肺から吸入された自然界の気の三者が結合して形成される。

気は、その存在する場所によって機能が異なり、いくつもの種類に分けられる。このうち、営気は血とともに脈中を循環して全身を栄養し、衛気は脈外を循環して臓腑を温め、皮膚を潤し、腠理(皮膚の紋理・汗腺・立毛筋などの体表部の組織を包括している)を滋養し、汗孔の開閉をコントロールするほか、肌表を保護し、外邪を防御する。また、各臓腑・組織・器官は独自の気を有し、それぞれの機能を発揮している。

さらに、胸中には宗気が、下腹の丹田には元気が存在している。宗気は自然界から吸入した気と飲食物から摂取した穀気が結合して胸中に集まったもので、呼吸を行い、気血の運行に関与する。言語・音声・呼吸の強弱などはすべて宗気と関係がある。元気は、原気・

真気ともいわれ、人体の生命活動の原動力となる気で、腎精から気化し、丹田に蓄えられている。人体の生長発育を推進し、人体各部の生理活動を発揚させる。

人体の生命活動は、気の運動にもとづくものであり、全身を流れめぐり、至らないところはなく、常に運動している。気の運動を「気機」という。

なお、気は人体内の法則に従って循環しているが、特殊な状況では、体内を一定の方向に流れたり、あるいは体外に向かって放射され、外界に影響を及ぼす(訓練によってこれを行うことを「気功」といい、治療にも応用される)。

② 血

血は、営気の一部が循環中に心の君火の作用を受けて赤く変化したもので、その主な機能は、全身を栄養することである。全身の各部分は、血によって十分栄養されてはじめて、各種の生理的活動を發揮できる。また、血は精神活動の主要な物質的基礎でもあり、「神」

(後述 p.98)を涵養する働きがある。

なお、血は気の存在下に生体を循環し、その生理機能を發揮するので、「気は血の帥」といい、また、気は血の栄養を受けてその作用を發揮するので、「血は気の母」という。血は必要に応じて腎精に化生し、腎に蔵される。腎精もまた必要に応じて血に化生し、両者は相互に転化する関係にある。すなわち、血の生成には、営気から生じるものと、腎精から化生するものの二系統がある。

③ 津液

津液は、体内のすべての正常な水液の総称である。汗・唾液・胃液・腸液・尿などの分泌液や体液も含まれる。津液のうち、希薄なものを津、粘稠で濃厚なものを液という。津は皮膚や粘膜などに散布してこれを潤し、液は内臓を滋養し、脳髄・骨格を潤し、関節を滑らかに動かすなどの作用を有するが、元来一体のものであるので、「津液」と称される。

COLUMN

コラム

気の生理作用

気の生理作用は、本文中に述べたようなさまざまなものがあるが、基本的には以下の五つの作用に統括される。なお、中国の第六版以降の教科書では、この他に気の6番目の作用として栄養作用をあげているが、ここでは第五版以前の教科書に準じ、これを含めない。

1. 推动作用

臓腑・組織・器官の生理的活動を推進する作用をいう。血の生成と運行や津液の生成、輸布および排泄もこの作用による。

2. 温煦作用

人体の体温を保ち、各種の生理的活動を行う熱源の働きをいう。生理的な「火」の働きに相当する。

3. 防御作用

肌表を保護して外邪の侵入を防御する作用をいう。

4. 固摄作用

血や津液などの液体物質が流失するのを防止する作用をいう。血が血脈から漏出しないのは、この作用による。

5. 気化作用

飲食物から血や津液を化生したり、津液を輸布して尿や汗などに変化させる作用をいう。精と気の変換を指していることもある。

付. 栄養作用

気の生理作用としては、一般的に上記の5つが認められているが、営気や衛気が全身を栄養する作用を特に取り上げて、別に「栄養作用」の項目を置くことがある。